福岡教育大学紀要，第62号，第４分冊，1―9（2013）

20世紀はじめのフランスにおける日本語テキストの考察
―ジョセフ・ドトルメールの“*Le Premier Livre de Japonais*”―

A Historical Study on the Japanese Language Text Book in France Published in the Early 20th Century
―Joseph DAUTREMER's “*Le Premier Livre de Japonais*”―

飯　田　史　也

Fumiya IIDA
学校教育講座

（平成24年10月１日受理）

Ⅰ　はじめに

筆者はこれまで，19世紀後半～20世紀はじめにおけるフランスの日本研究者・日本語研究者たちによる日本研究・日本語研究，また彼らによって刊行された日本語文法書・テキストの内容について考察してきた。[1)]

本稿では，ジョセフ・ドトルメール（Joseph Dautremer）の *Le Premier Livre de Japonais.*, Paris, Garnier Frères Libraires-Éditeur, 1916. について分析考察を試みたい。書名の *Le Premier Livre* が示すように，日本語初習者のためのテキストである。

中国領事を務めたドトルメールは，1911年に刊行された *Yang-Tse*（『揚子江』）が中国内陸部の経済状況等を検証したものとして著名である。

いっぽうで1907年からは，パリの東洋語学校（École des Langues Orientales）において，レオン・ド・ロニ（Léon de Rosny）の後任として日本語講座を担当するなど[2)]，知日家としての諸種の活動も顕著であり，「日本の新たな保護領となった満州，朝鮮，台湾（nouveaux protectorats japonais: Mandchourie, Coreé et Formose）」[3)]の経済学と政治学を担当している。日本についての著作には，たとえばFrères Libraires-Éditeur社から出版された『わが同盟国日本』（*Chez Nos Alliés Japonais.*）などがある。

このようにドトルメールは中国への理解が深く，それまでの日本研究者と同様，その中国語知識，中国知識を生かして日本語について研究したものと思われる。

今回とりあげる *Le Premier Livre de Japonais.*（以下本書）は，全152頁３部構成になっており，第１部は全30の「課」（Leçon）と「会話」（Dialogues），第２部は「翻訳練習と訳読」（Thèmes et Versions），第３部が「慣用表現とよく使われる語法」（Idiotismes et locutions fréquemment en usage）となっている。

本書では表記される日本語に，かな・漢字の使用はなく，すべてアルファベット表記となっている。中国の説話を基にした物語が掲載されている第２部，多くの慣用的表現が紹介されている第３部で使用されている日本語もすべてアルファベット表記であり，漢字やひらがなの使用はない。また提示される日本文には，第１部各課でなされる文法内容等の解説に該当する説明が付されているわけではない。このため第２部，第３部の使用には，教授者の具体的な解説が必要であったものと考えられる。

ドトルメールはまず序言（AVANT-PROPOS）において，日本語に対する自身の見解と，本書編纂の目的を述べている。以下に訳出してみよう。

> 日本語は，現在知られている言語の中でも，おそらくもっとも難しい言語であろう。日本に渡来した最初のポルトガル人たちは，日本語を悪魔の言語（a lingua dos demonhos）と呼んだ。

私は日本語を簡略化してとらえる必要があると考え，この最初の本を著そうと試みた。完璧を目指そうという意図はないが，有用なものとなるよう願う。
（中略）
我々フランス人にとって日本語は，発音については非常に簡単である。フランス語と同様アクセントはなく，あったとしても末尾のシラブルだけである。他方で，言語としては非常に難しく，複雑であり，中国語より難しい。日本語には二つの言語があるということもできる。ひとつは，祖先たちから話されてきた（Yamato no Kotoba）あるいは純粋な和語であり，もうひとつはわれわれが（sino-japonais）と呼ぶところの漢語である。二つの言語では，話し言葉においても，書き言葉におけるのと同様，ともに難しさに結びついている。また日本は西洋の文明に同化すればするほど，漢語を使わなければならなくなる。というのは，あらゆる近代的術語を表す表現が，古来の和語にはなく，漢語から借用せざるを得ないからである。
（pp.1-2，以下（　）内に引用部分の掲載頁を示す）

ドトルメールは，ここで西洋からの近代的術語としての Électoricité = Den ki（電気）と Vapeur = Jō ki（蒸気）をあげ，それぞれの熟語について，それが中国語の（tien ki）と（tcheng ki）によるものであることを示している。続いて各国の日本学者（japonisants）たちによって，国際的に採択された日本語のアルファベット表記法について紹介した後，次のように続ける。

表記については，漢字と日本固有の二つの表音文字，カタカナとひらがながある。ひらがなは６～７の異なる書体を持つが，よく使われるのでしっかりと習得しておかなければならない。（p.3）

つぎにドトルメールは，漢字がしばしばその表意する意味を離れて，日本固有のことばに使われることに言及し，たとえば tokuri「徳利」という語は，徳（vertu）と利（intérêt）という意味を持つ二つの漢字で構成されているが，この語の場合，中国語本来の漢字の意味は考慮せず，表音のみに注意を払わなければならないという事例を紹介する。

ドトルメールは最後に，日本語は片言の中国語ではなく，他方，話しことばでも書き言葉でも，公文体でも書簡体でも，さまざまな書籍の文体でも，文型や表現，文の構成が非常に複雑であるため，かつてのポルトガル人たちが，これを「悪魔のことば」と呼んだことも理解できるだろうと結ぶ。

Ⅱ 「第１部」各課の概要

第１部ではその各課において，そのトピックとなる文法事項が解説してある。またフランス語訳をともなう日本語新出語彙がそれぞれの課において提示され，学習者は各課において日本語語彙を少しずつ習得していくようになっている。以下各課の特徴的な内容をとりあげて検証してみたい。

第１課は［Watakushi］，［Anata］，［Omaye］（以下アルファベットによる日本語表記を［　］内に記す）の３つの人称について，動詞［motsu］を中心に，主格（nominatif）を示すための副助詞［wa］と格助詞［ga］，対格（accusatif）の［wo］，疑問文表現（interrogation）をつくるための終助詞［ka］，接続詞［to］，否定表現をつくるための助動詞［masen］が提示され，

［Watakushi wa hon wo mochi masu］
［Watakushi wa hon wo mochi masu ka］
［Watakushi wa hon wo mochi masen］
［Omaye wa hon to fude wo mochi masu ka］

の文例が提示された後，「備考」（Remarque）欄において，接続詞「と」についてつぎのように詳説される。

日本語で［to］は，常に名詞のあとに置かれ，列挙の場合にはそれぞれの単語のあとに繰り返し置かれる。しかし，ふたつのフレーズの二つの要素をつなぐのに使われることはない。たとえば
j'ai le jardin et je n'ai pas le cheval.
を日本語にする場合には，
quoique j'aie le jardin je n'ai pas le cheval.
としなければならない。［to］は，二つの名詞と形容詞と代名詞のみ接続する。上記のような文例では，quoique は，動詞のあとに置かれる［ga］や［kérédomo］と訳される。たとえば，
je le jardin ai quoique, le chval n'ai pas.
［Watakushi wa niwa wo mochi masu kérédomo, uma wo mochi masen］
（p.6）

ここでは，「けれども」をもつ日本語の文例の語順をわかりやすくするために，フランス語自体の語順を

je le jardin ai quoique, le chval n'ai pas.

と，逐語対応させて置き換えて説明していること

が興味深い。

第 2 課は第 1 課同様に，3 人称の単複［Ano hito］［hito bito］［tachi］［domo］の解説および，格助詞の［ni］が示され，

［Ano hito wa ume no uye ni nani wo mochi masu ka］

の文が例示される。さらに助動詞［masu］の過去を示す活用［mashita］が提示される。また一般的に会話では 1 人称，2 人称の代名詞は使用されないことが説明される。

第 3 課では，［Donata］［Dare］［Dono］［Donna］［Dore］などの疑問文で使用する代名詞や連体詞が提示され，

［Donna fude wo mochi masu ka］

等の例文が示される。また「備考」では，

属格としての［Du］，［de la］，［des］は日本語の［no］に置き換えられるが，不定冠詞のような用法はない。たとえば，《le paine de l' enfant》を ko no pan とはできるが，《donnez-moi du pain》は単純に《donnez-moi pain》となる。

（p.11）

と解説される。

第 4 課では，日本語に男性名詞，女性名詞の別の無いことが重点的に説明され，ただし特定の名詞の前に［o］［me］をつけ，たとえば［o usi］［me neko］のように表現しうることが解説される。

第 5 課では，日本語には所有代名詞がなく，たとえば Anata no inu. のように，代名詞に［no］を付して表現することが示される。また vulgaire「常体」，forme polie「敬体」，forme très polie「強い敬体」の別が，

［Watakushiwa aru］

［Watakushiwa ari masu］

［Watakushiwa gozai masu］

の 3 つの文例で示される。

第 6 課では，時制による日本語の動詞の活用について，1 課での概説がさらに詳しく述べられ，「日本語の動詞は，フランス語のように人称によって変化することは無く，その動詞がどの人称の述語であるかは，代名詞が示す」（p19）ことが説明される。したがって，常体の場合，それぞれの動詞の語尾に，現在形（présente）では［u］を，過去形（passée）では［ta］を，未来系（future）では［ô］を，分詞（du participle）には［te］をつけ，たとえば［a ru］，［at ta］，［arô］，［at te］等と活用させることが示されている。また，敬体の場合には，それぞれの時制に助動詞［masu］，［mashita］，［masyô］，［mashite］を付し［ari masu］，［ari mashita］，［ari masyô］，［ari mashite］が例示されている。

第 7 課では，おもに叙法（modes）に関する説明が述べられ，「日本語の活用は，すべて叙法と時制による。フランス語の条件法と接続法は，直接法の時制に結びつく後置詞の援用で表現される。」（p26）と概説される。以下，受動態（passif）については［are］を，使役形（causatif）は［saseru］を，願望形（désidedatif）は［tai］［to］［taku］をそれぞれ後置詞として付することによって，また可能形（potentiels）は動詞の語尾の［i］を［e］に置き換えることによって作られることが解説され，それぞれ［taberare masu］，［tabesase masu］，［tori tai］，［taberare masu］が例示される。またここでは，受動態表現がそのまま可能表現に使用され得ることが示される。

さらに，日本語にはフランス語における，il pleut（雨が降る），il neige（雪が降る），il tonne（雷が鳴る）のような il による非人称法がなく，それぞれ

［Ame ga furi masu］（la pluie tombe）

［Yukiga furi masu］（la neige tombe）

［Kaminari ga nari masu］（le tonnerre gronde）

のように表現せざるを得ないことが示される。

また代名動詞表現としては，たとえば［Hanashi au］，［Ai tatakau］のように，［ai］［au］を付すること，またこれら再帰代名動詞には，フランス語の soi-même の意味として［Midzukara］，［Ji］，［Jibun］が使われることを示している。

第 8 課は，助詞［Wa］，［Ga］，［No］，［Ni］，［Wo］，［De］の説明である。

［Wa］については，

［Watakushi *wa* tabe masu］

のように主格を表現し，さらにその前に［ni］を伴うことによって，［Watakusi *ni* wa ］（quant à moi）と表現されうることが示される。

［Ga］については，同様に［Ame *ga* furu］のように主格を示す他，対格や属格表現にも使われることが説明される。

［No］は［Watakushi *no* inu］のような属格の他，

［Makoto *no* kokoro］のように体言修飾にも使われうることが示される。

［Ni］は［Watakushi *ni* kudasai］などの与格表現の他［Hon wo anohito *ni* yomareta］などのように，受動表現の補語として使われることが紹介される。

［Wo］は［Inu *wo* butsu］のように動詞の能動態の対格のほか，

［Watakushi no ashi *wo* inu ni kuitsukareta］

のように受動態表現の主語を示すことが示される。

［De］は［Te de butsu］，［Fude de kaku］のように時間，場所，方法，手段を示す奪格の用法の他，［aru］，［ari masu］，［gozai masu］の前に置かれた場合には

［O taku wa kore de ari masu］

のように，主語を表すことが示される。

第 9 課は，［Do］，［Ikaga］，［Dono yo ni］，［Itus］，［Nan de］，［Nani wo motte］，［Doko ni］，［Dochira ni］，［Doko ye］，［Dochira ye］等の疑問を示す副詞や疑問節が示され，［Do］，［Ikaga］等の副詞では，

［Go ki gen wa *do* de gozai masu ka］

のようにすぐ前に［de］を伴うことが示される。ただし，どのような手段を使って来たかを尋ねるもう一つの例文

［Ikaga de ki masita ka］

Comment êtes-vous venu?

の［Ikaga de ki masita～］は，不自然な表現になっているといえよう。

第 10 課は形容詞の活用の説明がなされ，続く第 11 課において比較級（comparatif）の説明がなされる。ここでは，

比較級を作る場合には，［yori］を使って

［Fujiyama wa betsu no yama *yori* takai］

のように表現すること，また比較を強調する場合には［nao］，［motto］を用いて

［Kore wa are yori *nao* yoroshii］

［Kono mono wa ano sakura yori *motto* yoi］

などと表現しうることが示される。

最上級（Superlatif）については，［Ichi ban］，［Motto mo］，［Hana hada］，［Shigoku］，［Tai hen］，［Taku san］などがしばしば援用され，

［Niwa no ki no uchi ni sakura no ki ga *ichi ban* tako gozai masu］

［Kono hito wa *motto* mo jōzu na hito de gozai masu］

等と表現される。

第 12 課は，フランス語の le mien, le tien, le sien にあたる所有代名詞表現に関わる説明である。ここでは，le mien, le tien を訳す場合には，

［Ano hitoa wa watakushino arui wa anata no hon ga ari masu ka］

A-t-il ton livre ou le mien?

と所有詞を続ければよいこと，また celui, celle を訳す場合には，

［Ano onnna *no* fu de ga arui wa ano onna *no* ani *no* fude ga ariamasu ka］

Avez-vous son princeau ou celui de son frère?

のように助詞［no］で名詞を続けていけばよいことが示される。ただしこの二つの日本文は，例示されたフランス文の訳文としてはやや不自然なものである。

第 13 課では，まず ni l'un, ni l'autre「～でも～でもない」の表現法の解説がなされる。ここでは

Est-ce ton frère ou ton père?

［Kono hito wa omaye no ani arui wa o maye no otot'san de ari masu ka.］

という質問に対し，

Ce n'est ni l'un ni l'autre.

［Dochi de mo ari ma-senu.］

［Ani demo otot'san de mo ari masenu.］

の２つの答え方が示され，

一般的に人物に対しては後者の表現，すなわち語を列挙してゆく方法が使われ，事物については何に対しても後者が使われる。

（p45）

と解説され，さらに

Avez-vous votre livre ou celui de votre frère?

［Anato arui wa kiō dai no hon ga ari masu ka.］

という質問文に対しての，

Je n'ai ni l'un ni l'autre.

［Watakushino demo kiō dai no demo ari masenu.］

［Dochi de mo ari masen.］

という回答が例示される。

つ づ く，celui qui, celle qui, ceux qui, qui, lequel, laquelle, le quells については，従属節の動詞の時制によってフレーズを転回させる方法に

ついて，詳細な解説がなされている。

たとえば，

Où est celui qui a battu cette femme?

Où est l'homme qui a battu cette femme?

の例文を日本語訳する場合，

Cette femme（acc.）avait battu l'homme（sujet）où est-il ?

の語順で，

［Ano onna wo butta hito wa doko ni ari masu ka.］

が示され，また

La femme qui porte l'enfant est dans le jardin.

は，

［Kodomo wo ou onna wa niwa no uchi ni orimasu.］

と訳出される。

なお，本書では人物に対しても多く［ari masu］が使われているが，上記の例文については，脚注で「一般的に Ori masu は，人物に対して ari masu の代わりに用いられる」（p.46）と述べている。

第 14 課は，que, lequel, laquelle にかかわる解説である。

すでにみてきたように，主語にかかる qui は日本語では使わない。直接目的語にかかる que も同様であり，フレーズを転回（tourner）させなければならない。これには二つのやり方がある。

（p.48）

として，

L'homme que j'ai frappe s'est enfui.

の仏文が，

［Watakushi ga butta hito wa nigéta］

と訳され，その逐語訳（mot à mot）が再度

j'ai frappe, l'homme s'est enfui

の語順に転回して仏訳される。また，たとえば

L'homme avec qui je suis sort est tombé.

Les boutiques dans lesquelles ils sont entré étaient jolies.

のような前置詞を伴う用例については，

［Watakushi to tomo ni deta hito ga korobi mashita］

［Ano hito bito ga haita mise ga yoroshu ari mahita］

の訳文が示され，それぞれ

avec moi étant sort l'homme est tombé.

ils sont entrés, les boutiques étaient jolies.

の転回した逐語訳が示される。また

Il a une maison don't les chambres sont grandes.

などの前置詞 de を内包する関係代名詞 dont の用例について，

［Ano hito wa iye ga ikken ari masu sono heya ga ōki］

という訳例が示される。ドトルメールは，これらを以下のようにまとめる。

以上見てきたように，日本語に関係代名詞は存在しない。無理をして（関係代名詞で）訳そうとしないよう充分注意しなければならない。破格語法（barbarismes）となり，現地の日本人には理解できないであろう。関係代名詞の qui や que があるところでは，フレーズを転回させるのである。

（p.49）

第 15 課は数詞に関わる説明であり，まず 10 までの数，

［Hitotsu ichi, Futatsu ni, Mitsu san, Yotsu shi, Itsutsu go, Mutsu roku, Nanatsu shichi, Yatsu hachi, Kokonotsu ku ou kiu, To ju］

が提示され，［Hitotsu, Futatsu］が純粋な和語であること，また一般的には漢語である［ichi, ni］が使用されることが示される。

日本語では，数詞（numérales）と呼ばれる限定詞がある。フランス語でもたとえば cent têtes de bétail（100 頭の家畜）のようにいくつかの数詞を用いるが，日本語ではすべての事物に固有の数詞がある。

（p.52）

とし，［Hiki（匹），Ha（羽），Nin（人），Hon（本），Satsu（冊），Sō（艘），Ken（軒），Ken］等が示される。

日本語の数の表現についての説明は，第 17 課においてもなされ，11 からの二桁の数から，999 などの 3 桁，さらに 1,000，10,000，100 万までの表し方が示される。また人を数えるときだけに使われるものとして，hitori, futari, yottari が紹介される。

第 18 課は，命令法（impératif）と仮定法の解説である。まず命令法については，動詞の語尾［u］を［e］にして，また一人称複数（première personne）では，動詞語尾に［ō］を付して，それぞれ

［yare, kike, ike, tore］
［kikō, yarō, ikō, torō］
とすることが例示される。またこれら二つの表現は常体であり，目下から目上への敬意を示す敬体表現として，
［O kiki nasai, O yari nasai, O iki nasai, O tori nasai］
［Kiki mashō, Yari mashō, Iki mashō, Tori mashō］
が示され，さらに相手の所有する事物の語の前に付する［o］，［go］，［on］等が例示される。

続く仮定法の解説は，簡易なものである。すなわち［Mōshi］を動詞の前に，［naraba］を動詞の後ろに付することによって仮定的表現が可能であり，また
［Kiki masu naraba kaki mashō］
のように［Mōshi］をともなわず，［naraba］だけでも可能なことが示される。また動詞の語尾に［tara］，［réba］，［eba］を付して表現することも可能であるとされ，
［Kiki masureba］，［Kiitara］，［Kakeba］
が示される。

第19課では，否定の副詞［kessite］，［ippen mo］等が説明され，その後，動詞に［tai］を付することで作る願望形が，［zehi］，［zehi tomo］，［dōshite mo］を付する方法とともに解説される。

第20課は，［kureru］，［Shimau］，［Kuru］等，補助動詞（verbes auxiliaires）についての解説であり，
Ne veux-tu me dire?
［Hanashite kure nai ka］
J'ai lu le livre.
［Hon wo yonde shimai mashita］
J'ai acheté an pinceau.
［Fude wo katte ki mashita］
等の文例が示される。

第21課では，encore の訳語としての，［mo］が，肯定文の場合に en autre および de plus の意味として使われることが，
［Kono hon wo mo ippen motte koi］
などの例文で示される。また［mo］には，aussi également の意味としての，
［Kino basha ni Kinoda san mo ori mashita］
の文例が示されるが，前者の［mo］は副詞の「もう」，後者の［mo］は副助詞の「も」であり，ここには［mo］の，発音と用法についてのドトルメールの誤認がみられる。

また ne…pas encore の意味を示すためには，［mada］を否定文で使い，
［Tegami wo mada kaki masen］
等の例文ができること，また時間の継続を示す場合（le mot *encore* indique la duée）には，［mada］を肯定文で使用し，
［Ano hito wa mada kaite ori masu］
等の例文が可能であることが示されている。

第22課での解説は，de を伴う間接目的語としての en および副詞の y の日本語への訳出についての解説である。解説は，en の用法を3つに区分し，以下のような解説が，それぞれに該当する文例を示してなされる。

1．en が不特定の語，あるいは既出の語を示す場合には（後者の場合はその名詞を再出させる）日本語では en は訳されない。
［Omaye wa pan wo mochi masu ka］
Avez-vous du pain?
［Mochi masu］
J'en ai.
［Saji wo mochi masu ka］
Avez-vous une cuiller?
［Hitotsu mochi masu］
J'en ai une.

2．en が前置詞と代名詞から変化した場合には，変化した前置詞と代名詞を使う。
［Itsu kono machi kara o denasai mashita ka］
Quand êtes-vous sorti de cet ville?
［Sakujitsu de mashita］
J'en suis sortit hier.

3．en が前置詞の場合には，［ni］= *dans* を使う。
［Anatano tomodachi wa dochira ni sumai masu ka］
Où demeurent vos amis?
［Machi ni］
En ville.
（pp.73-2）

en についての解説は，28課においてもつぎのようになされている。

先に見たように，日本語では前置詞である場合を除いて en は訳さない。しかし現在分詞を伴う場合には，lorsque の使用，すなわち以下のように動詞の後に［nagara］を置くことによって表現可能である。

En revenant de chez moi je le vis dans la rue (lorsque je revenais) :
[Uchi yori kaeri nagara ano hito wo michi ni mi mashita]
(pp.89-90)

つぎに y については，

同じく y も日本語には訳出されない。より詳しく叙述したい場合には，副詞 là や，en-cet endroit，en cette maison 等を使う。

[Naze otot'san no uchi ye iki masen ka]
Pourquoi n'attez-vous pas chez votre père?
[Tada ima　achira ye iki masu]
J'y vais maintenant.
(achira ye = là)
(p.73-4)

第 23 課は，時制に関する解説である。ここでは

[Anata wa hairi mashita tokini watakushi wa kaite ori mashita]
J'écrivais quand vous étes entré.
[O tot'san biōki de otta to mi mashita toki ni naki mashita]
Il a pleuré quand il a vu son père malad.
[Tegami wo kaite shimai mashita tokini de mashita]
Quand il eut écrit sa letter il sortit.

の 3 文例が示され，それぞれについて，

半過去（imparfait）は，現在分詞に先行する動詞の過去形（preterit）となる。

定過去（passé défini）と，不定過去（passé indéfini），前過去（passé antérieur）は，過去形（preterit）となる。

大過去（plus-que-parfait）は，ときに意味内容を明確化する副詞に先行する過去形で表現される。

まとめて言えば，日本語には一つの過去形だけがあり，定過去，不定過去，前過去等の差異は存在しない。

半過去については，現在形同様，よりしばしば使用される表現は英語のそれに対応する。

I am doing; I was coming.
Je fais = shite ori masu（je suis faisant).
Je venais = kite ori mashita（j'étais venant).

未来形（futur）は，通常現在形で示され，未来について述べるときのみの表現である。

J'irai demain.
[Myō go nichi Kanagawa ye iki masu ka]
Irez-vous après-demain à Kanagawa?
(p.75-6)

と解説がなされている。ただし，上記に示された日本語例文も，不自然な表現である。

第 24 課では，Il faut が

[Na kereba nara nai]
[Na kereba nari masen]
[Neba naranu]

で，また Il ne faut pas が現在分詞を伴って

[Ike nai]
[Ike masen]

で表現されうることの説明が簡潔になされ，以下

[Tabe na kereba nari masen]
Il faut que je mange.
[Ne na kereba nari masen]
Il faut que je dorme.
[Yomaneba naranu]
Il faut que je lise.
[Waratte ike masen]
Il ne faut pas rire.
[Asonde ike masen]
Il ne faut pas s'amuser.
[Kokoni tomatte ike nai]
Il ne faut pas rester ici.

の 6 文例が示される。しかし禁止を示す後者 3 文例たとえば［Waratte ike masen］は［Waratte wa ike masen］となるべきであり，「は」が欠落してしまっているといえよう。

つぎに文法やその用法について詳しい説明が出てくるのは，第 30 課である。ここでは［Yoi］→［Yoku］，［Nagai］→［Nagaku］のように形容詞の語幹に［ku］を付することで，また動詞の過去分詞によって副詞を作ること，日本語には前置詞はなく後置詞（助詞）があること，[Oi]，[Aita]，[Iyada]，［Kore］，［Mā dōmo］，[Sa,sa］のような日本語固有の間投詞のあることが示される。

Ⅲ　結語 : *Le Premier Livre de Japonais.* の特色

本書の特色を，筆者がかつて検証したことのある[4] 東洋語学校日本語講座の前任者，レオン・ド・ロニの著した，同じく初級者向けテキスト *Introduction au Cours Japonais.* の内容と比較することで考察してみたい。

ロニの *Introduction au Cours Japonais.* では，２部構成で編纂されたその第１部が日本の地理，歴史，宗教などの解説にあてられ，日本語そのも

のの解説は第２部においてなされていた。つまりこれは日本語解説書にとどまらず日本文化に関する学習教材も兼ねていたのである。

日本語初学習者に対するロニの工夫は，フランス語の S-V-O（主語－動詞－目的語）の語順が，日本語では S-O-V（主語－目的語－動詞）の語順であることについて，たとえば

［ini-wa niku-wo motsi-masu］
［Anatano an-baï-va idzudemo yorosyu gozaï-masu ka］

を

［chien le viande la avoir］
［Vous de santé la toujours bien est est-ce que?］

として解説しようとしたことであった。定冠詞が［chien le］，［viande la］，［Vous de］，［santé la］のように名詞と前後して置かれているのは，それら定冠詞に主格，対格の日本語の助詞の役割を与えて説明しようとしているからであった。

さて先に見たようにドトルメールもこうした解説の方法を採り，

［Watakushi to tomo ni deta hito ga korobi mashita］
［Ano hito bito ga haita mise ga yoroshu ari mahita］

のそれぞれの仏文センテンス

L'homme avec qui je suis sort est tombé.
Les boutiques dans lesquelles ils sont entré étaient jolies.

を，逐語訳（mot à mot）として

avec moi étant sort l'homme est tombé.
ils sont entrés, les boutiques étaient jolies.

などの語順に転回することで示していた。ドトルメールは，その逐語訳（mot à mot）の解説手法を，さらに関係代名詞の解説にまで援用したのである。ロニとドトルメールが，日本語の語順に着目して解説を試みているのは，ふたりとも，自身が中国語を習得した上で日本語を習得したことに関係するかもしれない。

ロニは，たとえば「國」「白」「日」「月」の中国語発音［koueh］［peh］［jih］［yueh］が，日本語では［kok］［hak］［nits］［gets］と異なっていることに注意を促すなど，学習者がすでに中国語を習得していることを前提とした解説をいくつか記していた。また日本語学習における漢字習得に中国語教材を使うことについては，漢字の用法の相違，中国語文法との相違等を理由に批判していた。他方ドトルメールは，「序言」において，日本語は中国語より難しいと述べ，さらに「日本語は片言の中国語ではないのだ」と記し，中国語既習者への注意を喚起しているが，第１課以下の具体的文法解説の中では，中国語との差異を示すことは行なっていない。

ロニは日本語のくずし字（l'écriture des broussailles）についてふれ，「その奇妙な形状，限りないバリエーションのため，その字を識別するのは困難であり，その困難さは，極東の文献研究に取りかかりたいと望む，大部分の東洋学者たちを絶望させた」[5] と述べていた。いっぽうドトルメールは序論において，日本語の字体について，ひらがなが６～７の書体を持つことに触れ，むしろその習得の必要性を述べていた。こうした陳述の差異の背景には，ロニのテキストの刊行された 1872 年頃に比べ，ドトルメールの時代には，フランス人が触れる日本語文献に，すでに活字印刷されたものが増えていたこと等が考えられる。

ドトルメールの解説の特色は，各課でとりあげる文法的トピックが，叙法（mode），時制（temps）等フランス語文法の用法ごとの区分となっているなど，フランス語文法の構造や枠組みを援用し，その比較において日本語を解説しようとしていることである。このためフランス人学習者であってもフランス語の文法やその用語を構造的に認識していなければ，本書の使用は難しいものであったかもしれない。またこうした編集方針のため，フランス語の文法構造からの一方向の解説（すなわちフランス語のこの文法用例は，日本語ではどのように表現するか）になっており，たとえば日本語の動詞や助動詞の語尾活用などの説明，あるいは日本語固有の文法事項の説明には不十分な部分のあることは否めない。

同じ初習者用テキストでありながら，ロニのそれが，日本文化・社会の概説と，日本語の全体的概要を俯瞰させることで日本語学習のスタートを切らせる方針であったのに対し，ドトルメールのそれは，学習者の母語であるフランス語の言語構造を日本語理解の枠組みとして踏まえさせることで，初習段階から多様な表現方法を習得させようとするものだったのである。

Ⅳ 註

1）以下の拙稿がある。

①「19 世紀フランスにおける日本学の進展―日本語文法書の発達を中心にして―」（『福岡教育大学紀要』第 39 号，第 4 分冊，平成 2 年）。

②「19 世紀日仏における多言語対照辞典の研究　―『五方通語』と『仏英和辞典』―」(『福岡教育大学紀要』第 40 号，第 4 分冊，平成３年)。
③「19 世紀末におけるフランス人の日本研究に関する考察　― André Bellessort の“Les Journes et les Nnuits Japonaises”を中心に―」(『福岡教育大学紀要』第 42 号，第 4 分冊，平成 5 年)。
④「19 世紀中期のフランスにおける日本語テキストの考察　―レオン・ド・ロニの“Introduction au Cours de Japonais; seconde édition”―」
(『福岡教育大学紀要』第 48 号，第 4 分冊，平成 11 年)。
⑤「1860 年代フランスにおける日本情報に関する考察　―レオン・ド・ロニの“La Civilisation Japonaises”を中心に―」(『福岡教育大学紀要』第 49 号, 第 4 分冊, 平成 12 年)。

2) 富田仁編『辞典外国人の見た日本』日外アソシエーツ，1994 年，504 頁。
3) Numa BROC, *Dictionnaire Illustré des Explorateurs Français duXIXe Siècle Asie.*, Editions du Comité des taravaux historiques et scientifique, Paris, 1992. pp.118-9.
4) 前掲註 1）の④。
5) 同上。